

堀田あすみ

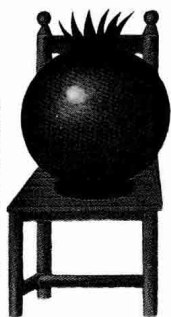
hotta asumi



アイコ
十六歳



堀田あけみ



十六歳
アイコ
680

1980 アイコ 十六歳

昭和五十六年十二月 十日 初版発行
昭和五十七年二月二十五日 十六版発行

著 者 堀田あけみ

カバー・扉装画 桑原伸之

装幀者 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 編集〇三―四〇四―八六一―

営業〇三―四〇四―一二〇―

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

© 1981 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

堀田あけみ

本名・堀田朱美。

昭和三十九年愛知県生まれ。

県立中村高校在学中。

「1980 アイコ 十六歳」で

昭和五十六年度文藝賞受賞。

1980

アイコ

十六歳

夏

どんなに寒くても冬が好きだ。なぜか、大好きだ。

そういうと、友達はみんな首をかしげる。そして言う。夏が好き。春が好き。秋が好き。わかってる。夏っていうのはいかにもはつらつとして若そうだし、春・秋は暮らしやすい。伊吹おろしをまともにくらって、何が楽しいかってんだ。それなのに冬が好きだなんて、我ながら、おかしなもんだ。

いつからそうなったかは覚えていないけど、昔、秋が好きだった時期があったことは覚えてる。その前は、いつが好きだったのか知らない。確かに言えることは、夏が好きだった時期なんて、一度もなかったってことだ。黄色い太陽は爆発を連想させる。夏の太陽は、凶器だよ。確実に、冬とは違う。

そして夏になれば、国中が戦争戦争と叫び出す。戦争は知らないけれど、その存在は忘れない。けっして許さない。若い者に何がわかるって、言われるよね。わかんないよ。戦争を知らないのは、こっちのせいじゃない。だから、必要以上に騒ぐことないでしょって言いたい。できたらそつとしってほしいってのが本音だ。囁いてくれれば、一生懸命、考えるから、ね。話をきくと、とっても心が痛むもの。

戦争……人類最大の矛盾。

「賛戦論」があるって、本当ですか？ そんなこと言う人の気持ち、測り知れない。どういうつもりじゃ。真の平和などあるわけがない。今までになかったんなら、これからつくろう。どんなに偉いこと言ったって、命を無視することは許されない。命がなけりゃ、元も子もないもんね。自分の命じゃなけりゃ、消えてもいいと考えるなよ。とにかく八月は去る。すうーっと日本は秋になじんで行く。

戦争も、怪談も、水の事故も、来年までさようなら。

そういった問題、ちっとも解決なんかしていないが、今度は台風や、敬老や芸術・スポーツ・読書・食欲に忙しい。そいつがいけないことだ、とは思わない。そうしないと、生きていくのがしんどい。それで不平不満をたれては、満足そうな顔して四季について行くのだ。

三田アイコ。

簡単に書ける。よって、試験の際に答案用紙に名前を書くのに、時間をとられずに済む。覚えやすい。

自分の名前の長所はこの二つ。それ以外の点において、この名前は好きじゃない。今っぽく言うと、好きくない。長所だって、たいしたことないや、と思っている。親のつけた名前に文句をつけるとは何事ぞ、と言う人もおるが、親のつけた名前だからこそ、一言も二言も言いたいのである。姓のほうは、人の好みで持たされたものではないから不可抗力と諦めることもできるけれど、名前のほうは親の好みがモロに出してしまう。だいたい、親は名前に望みを託すらしいが、それならアイコの両親は彼女に何を託したのだろう。もっと、常識の範囲内でつけてほしかった、と恨まずにはいられない。恨む、というのもけて大袈裟ではない。どんな所へ嫁に行こうと、いや行こうが行くまいが、一生「アイコ」とは同伴しなければいけないのだから、事は重大だ。

どこがそんなに気に入らないかというと、まず、片仮名である所がいけない。「愛子」とか「あい子」ならなじめただろう。アイコ、なんて見た目にも軽薄そうだ。名前には、立派な意味を持った、漢字を使うべきだ。平仮名も、せいぜい女の子にしか使わないほうがいいだろう。男の子だと、どうも軟弱そう。名前とは、もう一つの

顔だと言う。そんならあたしの顔はへちゃむくれた。

などと、しょうもないことばかり考えているのがアイコ。高校一年生である。「アイ」という名の子は、だいたいこんなふうに呼ばれているのだから、ご多分にもれず、彼女のニックネームは「ラブたん」。

ちなみに、目下の親友であるゴンベは、本名を平塚詩穂乃という。「ヒラツカシオノ」と発音するが、仮名書きだと「しほの」だ。アイコがうらやむところの一つがこの名前。ところが本人は、たいして気に入っていないと言う。もっとやわらかい感じが好きなのだそう。そんなゴンベをアイコはぜいたくい、と言ってやる。(正しい日本語とは思えないが、贅沢な、という形容動詞とはニュアンスが違う。)その詩穂乃ちゃんに、いかにして「ゴンベ」などというすこぶる優雅ならざる愛称がつけられたかというのには、単純にして複雑な理由がある。「しほの」から「しお」へ、さらに「ごましお」「ごんべ」と変化したのだそう。アイコは、その時の気分で、彼女を、「らいてふ」と呼ぶ。それも「ライチョウ」とは発音せず、そのまま「ライテフ」と言うのである。言うまでもなく、かの有名な平塚雷鳥に由来するものだ。しかし、字面だけでつけた呼び名ではない。ゴンベは優しく強い、女の中の女である、とアイコは尊敬しているのだ。

アイコは、自分をごくごく普通の女子高校生だと思っている。ところが、この普通

の、というのが非常に難しい。たとえば、スカートをひきずるほど長くして、せんべいの如き学生靴を指先にひっかけて歩いてるのが珍しいかと言うと、そうでもない。しかし、世間一般で高校生から連想するイメージは、自然な髪型に白いソックス、というものらしい。事実、それも珍しくない。つまり「普通」の意味するところは想像を絶するほどに広い。極端な言い方かもしれないが、少なくともアイコの知る範囲内では高校生であれば、即、「ごく普通」なのである。その外のことは、皆目知らぬ。

アイコは数カ所について友人から、「普通とは思えん。」と言われることがある。そのうちの一つが、アイコたちの三大関心事——アイドル・食べ物・男の子——のうちのラスト、恋愛についてだ。ほとんどの友達が、今まで三回以上の心変わりをしてるのだが、アイコは小学校時代から延々と一人の人を想い続けてきた。ちゃんと両想いってとこまで行ったけど、もう終わっちゃったのよね。これで、ワンセット終了させちゃった。みんなが言った。両想いだけは、一人つきりでは体験できないもん、少しの間だけだったとしても羨ましいって。そんなもんかなあ、と思うアイコには、一年前の純粹に想いつめていた自分という中学生のガキが、少々腑に落ちない、とさえ感じられる。

だいたい、高校が別になった時からやばいなア、とは思っていた。あちらさんは地元和学校でこっちは少々名前の通った学校群の中の一つ。逆なら救われたかもしれないな

いけど。アイコは入学してみて驚いた。彼のいない学校なんかつまないだろう、なんてしょぼくしていたら、高校のほうがずっと暮らしやすい。ちっとも寂しくならない自分が不思議だ。そう思いつつ、一学期が終了して、一番嫌いな夏が来たら、あれまと言ってるうちに終わっちゃった。こいつが、初失恋としてはオク手らしい。もともと片想いだけで想いも告げずに勝手に失恋するのを含めて、だが。あとから開き直れば何とでも言える。ふられる、とか、ふる、の問題じゃなくって、自然現象として離れてったんだって。やばいなアってのは、単に二人が全然ちがう生活に入っちゃったやばさではなく、自分自身の心が頼りなくなっていくやばさでもあった。つまり、アイコにもそろそろ……カナアという気持ちはあるって、ふられたんじゃないよって、言おうと思えば言えるわけ。それに気になる人、他に出てきたし。それでも当時はめっちゃくちゃに純だったから、裏切るわけにはいかないとおさえていた。考えてみればおかしいよね、自分の意志を曲げようと必死になっていた。それでも当時はとても真剣だったのだ。

そこで、まあまあ続いていたけど、お互いに合宿に行ったら、アウト。

電話の向こうとこっちゃ、らちがあかんとはいはしたけど、顔を合わせたりしたら、ますます話がこじれる。長い長い間、しょうもないこと話し合って、アイコはいらいらしてきた。一言、「さよなら」って言ったら、受話器を置けるのに、いった

いあたしら二人して何をやっとなんじゃ。

「ねえ、やめよっか。」

アイコは何気なく言ってみた。相手の反応はない。あ、そうか。こいつ知らないんだ。あたしがマールコから情報仕入れたってこと。

「新しい彼女がいるんなら、無理しなくていいからね。あたしだって、二股かけられるのいやだし。」

そう言ったら返事は一言。

「さよなら。」

やったぜ、と思った。八十点の別れ方だ。それからアイツとは一度も会ってない。

その夏、アイコが初体験した合宿。こいつは、アイコの心がぐらついた最大の原因なのだが、サイコーにきらきらしていた。アイコは弓道部ってところにいる。なんでもかっけ言う、小学校の頃からやりたかったのね。中学校には常識としてなかったから、高校に入るまでもなく心を決めていた。現在に至る。そこで、弓を練習するための合宿があるわけで、七月の終わりに三泊四日。ついでに言っとくと、ここは男女合同練習である。ここまで条件がそろっていたからと、よろめいたわけでも、ないのだらうけど。

ちなみに、相手の合宿は学校単位で行ったんだそう。それで決定打を打ってくれたとは、ふがいないんじゃないかと思う。どっちかつうと中学生なみだと思ふのね。何百人で行って、オリコーに先生の言う事をきいて、そうそう親密感深めちゃうとはね。どう見ても、こっちが正しい、という理論が成り立つ……わけない。

こういう話をピーマンと言うんだよね。反省を要する。

そこでアイコにとっての決定打は何であつたか。

どうも看的だつたようだ。看的というのは矢のあたりはずれを見て、知らせる役目だ。矢場、あの的がずらつと並んでいる所の横に看的小屋というのがあつて、その中からのをもう一つ、出したり入れたりして射場に知らせるのである。裏を出せばはずれで、表を出せばあたり。単純だ。

そこで四日間、ずっと鉢合わせし続けたつてこと。やっぱりアイコもふがいあるとは言い難い。

早寝遅起きを旨とするアイコは、まったく同室の友人泣かせだつた。夜は一人で早々と寝てしまふ。初日はその眠りつぶりに敬服して、他の友人も声をおさえたが、

二日めからは何も気にしなくなった。彼女が一度眠ってしまえば、よほどの事があっても、目を覚まさないことが判明したからだ。

というのは、一日めの夜というか二日めの朝というかの午前一時二十分頃、震度3という地震があったのだ。もちろん、ほとんどの者が飛び起きた。もともと眠っていなかった者も少なくない。部長と顧問が、すべての部屋を一応確認したこともあり、全体がざわついていたが、その中であってただ一人、アイコだけが丁寧にいびきまでかいて熟睡していたのである。かてて加えてそれが静まりかけた頃には、寝屁をこいた、という者まで出てきた。それで、これなら他人がいくら騒いだところで迷惑にはなるまい、と判断が下された。アイコのほうは、単に眠っているだけで度はずれた迷惑をまきちらしているのだ。

二日めの朝、どういうわけかアイコは早く目覚めた。部屋の中がしん、としている。奇妙に優しい明るさは、もやを通り抜けてきた光のせいだろうか。緑濃い山たちが下半分すりガラスの窓からのぞいている。無遠慮な様子が男性的なこんな山は、アイコのお気に入りである。まるでカレンダーの中へ入っちゃったみたい、と思って、自らのイメージの貧困さに呆れた。どうも現代に毒されている。一人で舌を出し、肩をすくめると、階下の洗面所へ降りて行った。赤い色をした階段はなかなか急で、ねぼけまなこには少々あふない。

洗面所には、別室にいる金沢清美、通称おきょんがいた。おはよう、と挨拶を交わす。「ゆうべ、すごかったねえ。」

おきょんに話しかけられて、アイコはきょとん、とした。

「なにがあ。」

「地震だがね。知らんの？」

おきょんがすっとんきょうな声をあげる。アイコは別に驚いたふうにもなく、ハブラシに練り歯みがきを絞り出している。旅行用ミニチューブの残りが少なく、苦労しているようだ。

「そんなに大きな声、出さんでもいいがね。あたしは、震度4以下の地震では、起きんのだわ。」

と、アイコは顔をしかめる。歯みがきが、うまい具合に出て来ないのだ。声も後半はかなり力が入って、苦しそうになる。

「あたしの使って」

おきょんは見るに見かねて、チューブを差し出した。旅行用のミニではない。

「あ、ありがと。」

と、遠慮なく、たっぷり使う。歯をみがくアイコを見ながら、おきょんがいかにも感心したように言う。

「しかし、ラブたんは偉いわ。あんなだけ揺すつたのに、起きいせんのだもん。ナツミなんか半分泣いとったに。」

「ほへは、ほへほんろは、へらひほんろか。」

「へ?」

アイコは、口の中の泡を、ぶあつと吐き出した。

「それは、ほめとんのか、けなしとんのか。」

「ほめとるんだわさ、もちろん。日本の女性は強いと思って。」

「単に図太いだけ、だったりして。」

そろそろ、他の人々も起きたようだ。アイコはその場をとんずらした。もう少し考えをまとめて地震の話題に臨まないと、変人扱いされるだろう。もう消すことのできない事実なのだが……。少々研究しとても悪かない。

アイコは部屋へ戻った。四人部屋だが、あとの二人は下へ行つたものらしく、一人しか残っていない。

「おはよう、モック。ねえ、ゆうべ地震なんか、あったあ?」

さっそく、きいてみる。

「あったよお。電燈も、がくんがくん揺れとったもん。部長先輩と先生、どえらい心配して様子みに来てくれたんだに。そんなのにラブたん一人、ちっとも起きいせんで

しょう。なっちゃんなんか、泣いっとたんだと。」

との返事。ヘエーと、今さらながら驚く。その日の朝はずっと、その話題が中心となつたが、アイコには何がなんだかわからなかった。朝食の時、ずらっと並んだ食卓の向こう側から、同室者の詳しい説明が聞こえてくる。

「ラブたんなんかねえ、ずっと寝とったんだよ。いつあつたか、どころか、そんなあつたあ？　だもん。夜は十時から今朝の五時までぐっすり。」

「俺も実は知らなかった。みんなが騒いどるもんで目が覚めたけど。」

「ラブたんは、うちらがいつくらわめいても起きなかったの。」

こっちからも怒鳴ってやる。

「いいでしょう。震度5になつたら起きて、ちゃんと逃げるわ。ゆうべなんて、震度3だがね。それに、あたしが寝とつても、べつに迷惑かかれせんがあ。あんたらみんな、いざという時には、あたし放つといて逃げるでしょう。」

向こうから、

「そうだね。安心しとっていいわ。いざつう時になるまでもなく、あんたのことは放つとくで。」

と返ってくる。そして話題は、地震そのものからは離れて、アイコの図太さに中心を移していく。アイコは丸い顔をますますふくれっ面にした。だけど、目は笑っている。